



混雑のゆくえ

相反する空間の共存





高度成長期を経て、社会が前進した一方で、都市での行動は効率化・目的化していき、人びとの本来的な自由な営みやふるまいは少なくなっていると考えている。



都市での「自由な場所」も少なくなっているのではないだろうか。

混雑のゆくえ



神社と都市の関係が強く表れていると思われる「表参道」に通常、都市の建築は「裏側」を持つ。その「裏側」を「表」で囲う

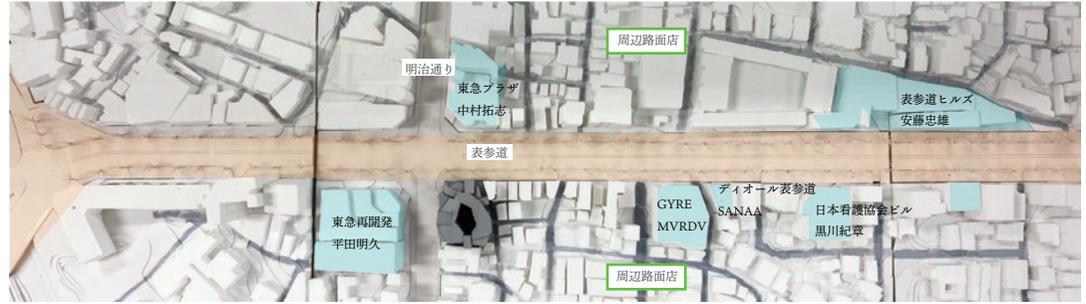
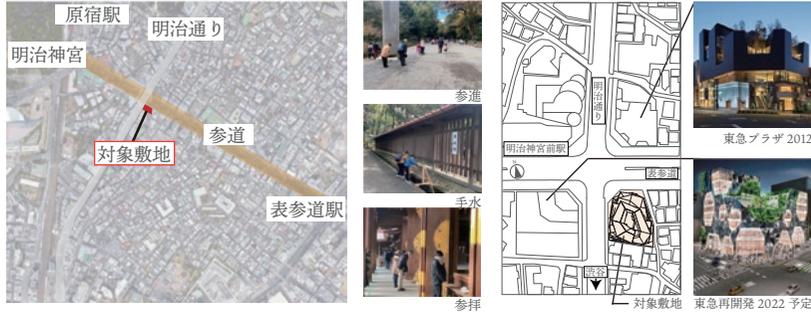
相反する空間の共存



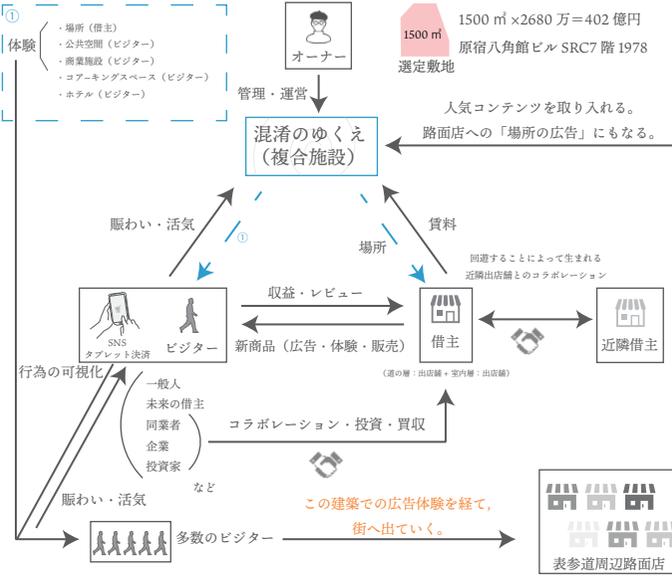
「静けさ」を持つ空間を内包した商業建築を提案することにより、「裏側」でなく、裏の「空間」として設える。

1. 現代建築に囲まれた対象敷地 (表参道)

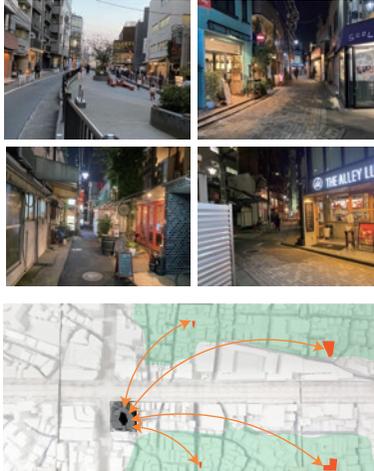
人の行動が「効率化・目的化して行く都市」であること。街が「神社との関係が深い」という二つから、表参道を敷地対象とする。ケヤキ並木、同潤会も含め、街並みには信仰の道という「明治神宮への参道」という意味合いを持つ石灯籠道も堂々と建っている。歴史が現代の街並みと調和しながら「街の色」として積層していく特徴を持つ。



2. 周辺の路面店を巻き込む経済循環



・周辺路面店との連携。
本建築を回遊することで周囲の店舗情報を体験できる。街の広告ともなり、街への活気へと繋がる。

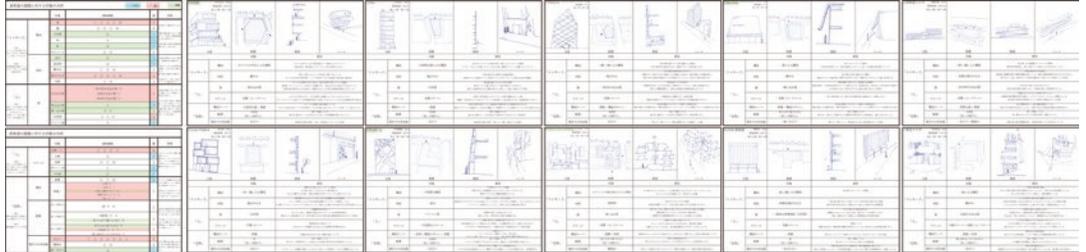


3. 周辺建築を複数継承した新たなファサード

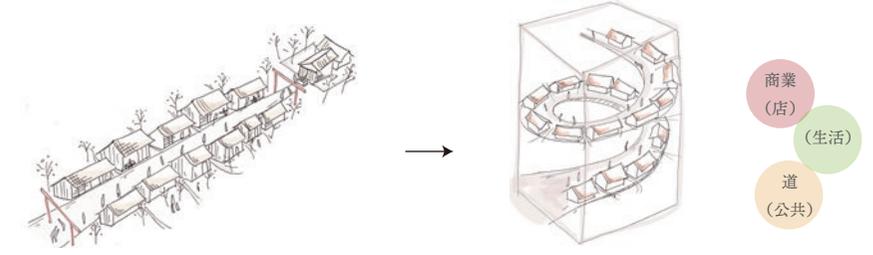
表参道という「参道」の線的な街に対し、多くの建築家達が「個性」を持つファサードで答えている。それら周辺の建築構成を分析し、本設計に継承していく。「個」が集まることで街が出来ていることから複数の建築ではなく、「一つの建築」としてこの街で新たな商業建築を提案する。

*継承部分：一部抜粋「フロムファースト」
建築構成がそのままファサードに現れる。都市では一般的な「面」的なファサードだが、表参道では立体的なボリュームが積み重なる「ズレ」が道に対して余白を生み出している。

⑨フロム・ファーストビル 山下和正 1975 敷地面積：1000㎡			
立面	配置	断面	パース
「ファサード」	構成 ・ボトム階の窓の大きさによる機能	印象 ・底層的	要因 ・大小様々なスケールのボリュームの積み重ねがそのままファサードとなっている。ボリュームによる空間感により、深みが出ている。
「人」	材料 ・鉄骨	道 ・深い込み型	・奥のより浅いスケールの構成。深みを出しているファサードと奥の深い型を組み合わせることで、奥行きが出る。奥行きが出ることで、奥行きが出る。奥行きが出ることで、奥行きが出る。
「全体」	スケール ・低層(人) スケール	構成テーマ ・商業 + 住居	・奥行きが出ることで、奥行きが出る。奥行きが出ることで、奥行きが出る。奥行きが出ることで、奥行きが出る。
	配置 ・底層でもあり深い「ズレ」を演出する		・奥行きが出ることで、奥行きが出る。奥行きが出ることで、奥行きが出る。奥行きが出ることで、奥行きが出る。

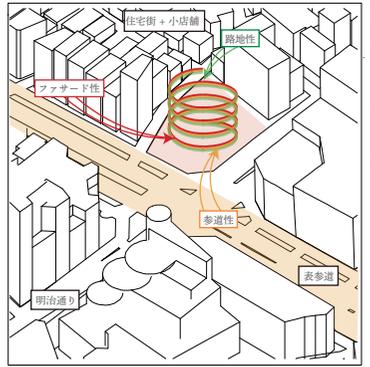


4. 建築ダイアグラムと平面計画



従来の道と生活、所業の関係性が近い「参道性」を継承する。

「3.リサーチ」引用。
表参道では個性を持つ建築達が道に連なる事で街を形成している。本建築も「一つの敷地」において、個性を持つ建築を設計する。「参道」を二重螺旋状に立体的に巻き込む。その構成がそのままファサードとなり、商業、生活、道、の関係性を近づける。



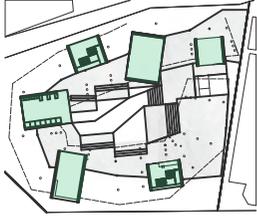
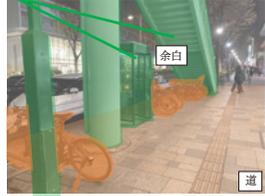
5. 各プログラムと建築形態

一等地である表参道にも「余白」が存在している。公共的機能である「電話ボックス」、「歩道橋」が本来デットスペースになる「余白」を受動的に生み出している。機能のない「余白」には人が介入でき、それらを許容する空間となっている。本提案では、その受動的に生まれる「余白」を継承し、設える。

・平面計画

分散された各コアに生活インフラを配置。分散された各コアが構造を担う。それにより活動や生活が立体的に交わる回遊する空間となる。従来の道、商店、生活の近しい関係性は本提案により、吹き抜けを通じて、立体的な近しい関係となりうる。

公共的機能「電話ボックス」・「歩道橋」



各コア

・余地と託児所(子供から学ぶ空間の在り方)

BIF: 子供を預けて施設を利用出来る「託児所」を計画する。また子供達が、本建築を立体的に回遊することで、自ら介入出来る余白や余地を自発的に見つける。その空間の使い方を大人が改めて学んでゆく。



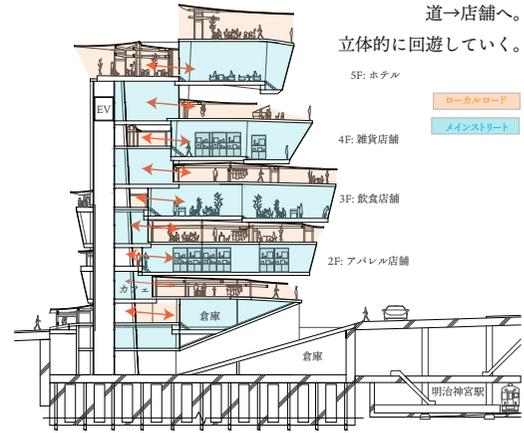
・駅直結ホテル(表参道に宿泊する価値)

「表参道」という一等地に「宿泊する」という価値を与える。駅からの動線として、最初に地下から内側となる裏側の虚の空間のみを見せる。Eyで登り、ホテル内から始めて外側の「表参道」を見渡す。



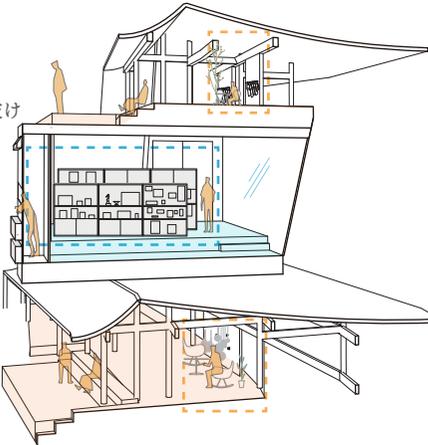
道→店舗へ。

立体的に回遊していく。



6. テナント形式(商業)と建築形態

吹き抜け

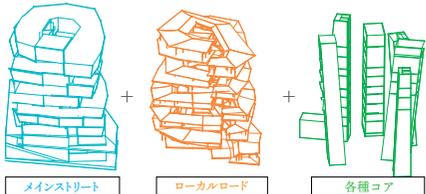


<テナント形式>

室内中、大規模テナント「メインストリート」 小規模テナント「ローカルロード」

表参道の高級なテナントが室内に集う「メインストリート」層、上下の「ローカルロード」層によって借りるテナントの向きが対になる。「メインストリート」表参道からの高級志向のテナントを引き込み、現状のビジター引き込む。「ローカルロード」テナント・木工用の枠を使用。仮設壁、広告、服レンタル、タブレット端末により情報を読み込むことで周辺の店舗状況も知れる。商品の広告、店の広告、イベントの広告等多様な借り方が可能になる。

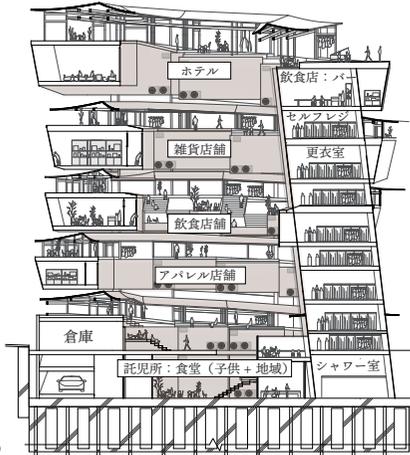
7. 受動的に生まれる「虚の空間」



メインストリート、ローカルロードら各コアが貫く建築構成がそのままファサードとなる。

メインストリート、ローカルロードの一連の空間を一度構築し、壊すことにより複雑でありながら新たな空間体験を生む。

それらは内側に受動的な「虚の空間」を生み出す。目的を持たないその空間は人の自由なふるまいを誘発する。



断面構成
「室内の店舗」の層と「半屋外の道」の層が巻くように二重螺旋の形状で建築を構成している。それらが外皮のように外の「枠組み」となり、中心は吹き抜ける空間となる。
・店舗構成
表参道側に開く幅広い店舗のガラス面は、表参道の街行く人に対し、傾斜しながら開く。店舗の行為が見える事で広告の効果をなす。吹き抜けは従業員スペースとし、店舗内を通行する人にとって吹き抜けは壁で見えない「裏側」となる。
・道構成
表参道側には身体スケールに底が深くかかることで、街の通行者人からの視線や情報ある程度遮断する。反対に吹き抜け側に短い壁を設け、広場のスペースを広く設ける。断面的に上下の人の居場所に差異をもたらせる構成。

5F 道 半屋外	・広域的な高さも持たない「道」の広場とする。機能と設えを決めないことにより「受け入れる」空間とする。
5F 室内	・ホテル(3室) 高級志向のホテルを3室のみとする事で、表参道の一等地に「宿泊する」という価値を生む。
4F 道 半屋外	・体験型ストアテナント、雑貨、服レンタル、広告
4F 室内	・体験型店舗 アパレル、雑貨、ブランド
3F 道 半屋外	・飲食広場・格安飲食店 ランチ、ドリンク、外飲み等、準2Fの店舗と接続
3F 室内	・飲食店、レストラン 高級志向のレストラン・格安飲食店が上下にある 中層階のテラスを境に「境界」を設ける
2F 道 半屋外	・体験型ストアテナント、雑貨、服レンタル、広告
2F 室内	・体験型店舗 アパレル、雑貨、ブランド
1F 道 半屋外	・体験型ストアテナント、雑貨、服レンタル、広告
1F 室内	・体験型店舗 アパレル、雑貨、ブランド
0F 室内	・生活) カプセルホテル コアキングスペース 事務室

A-A' 長手断面図